

外国語活動における小中連携

—教材研究に焦点をあてて—

M11EP004

梶原ナツミ

1. 研究の目的

平成 23 年度から始まった小学校の外国語活動では「楽しい」をベースとしたゲーム性の高い活動が行われている。一方で、中学校の外国語では、文法や技能面を中心とした学習が行われている場合が多い。このため、小学校の外国語活動と中学校の外国語において、小・中学校間にギャップがあると考えられる。

中学校学習指導要領の改訂では、言語活動において、小学校の外国語活動との関連を留意することが記され、小・中学校間で連携を行うことになる。

小・中学校間での外国語活動のギャップを埋める手立てがいくつかある中で、教材の工夫に焦点をあてた。言語表現のやりとりをする中で、子どもたち自身が言語の面白さや違いに気づき発見し、「自分の気持ちを伝えたい」という必然性をつくりたい。

本研究では、小学校の外国語活動に焦点をあて、効果的な小中連携を実現させる教材のあり方を考察していく。

2. 研究の方法

教職大学院の実習校である山梨県公立小学校 5 年生（5 名）を対象に、観察実習を通して、児童の実態把握をし、教材研究を行い、授業実践（4 回）を行った。単元は、Lesson5 「いろいろな衣装を知ろう」である。その後、児童の振り返りシートやインタビューを通して、その教材の効果を分析する。

3. 研究の内容

使用する教材は、語句や表現、絵カードとする。

今回は、小中連携を考慮し、学習指導要領に沿って、実際の言語の使用場面と言語の働

きを考察し、文献を参考に、この単元の目標を実現するため、教材研究を通して、教材を選定し作成していく。

(1) 語句や表現

語句の選定では、児童の実態に合わせることに身近なものを扱うことを大切にする。

扱う色は、現在の英語ノートでは、8 色 (red, blue, yellow, orange, pink, green, black, white) である。発音は日本語と違うが、言い方は同じものが多い。そこで、児童の好き嫌いや身近に感じている色、実際に身につけている色、色鉛筆や絵の具などの色も考慮し、5 色 (light green, light blue, purple, gray, brown) を付け加え 13 色を扱うことにした。

扱う衣服は、英語ノートでは、10 個 (T-shirt, sweater, pants, skirt, socks, shoes, shorts, cap, bag, dress) であるが、色の数を増やしたため、新しい語句については、あまり児童の身近ではない dress を減らし 9 個とした。

表現の選定は、実際の中で使うことができる表現を重視する。買い物場面で実際に使っている表現を ALT に伺い、相談して選定した (英語ノートも同じ表現を用いている)。扱う表現は、“Do you have ~?” “Yes, I do./ No, I don’t.” “I have~.” を基本とする。

(2) 絵カード

作成において、理解可能なインプットとなるために、音と物を具体的イメージで結ぶ視覚的に訴えるもの、つながりを意識し、慣れ親しむことを増すために繰り返し使えるもの、この 2 点を大切にした。

色の絵カードは、児童の身近である折り紙を意識し、画用紙を正方形に切ったものを作成した。視覚的に訴えたり、フラッシュカー

ドとして繰り返し用いたりすることができる。

衣服の絵カードは、子どもの思いを大切にしました。自分の気持ちや思いがことばになり、伝えることができるものを考慮した。英語ノートの衣服の絵カードは、1色のみの提示しかされていない。そのため、子どもが実際に身につけているものや欲しい色でない可能性が大きい。絵カードにあるから話すのではなく、欲しい色や衣服など自分の思いを伝えることができるよう、「言いたい」「使いたい」という好奇心を駆り立てる必然性をつくることが大切である。そこで、絵カードを作成するとき、画用紙を衣服の形に切り抜き、色画用紙を変えるだけで、瞬時に何色にも替えることができるよう工夫した。このことで、視覚的にイメージしやすく、自由に色と衣服を組み合わすことができ、子どもの思いに対応でき、思いが可視化できるようになった。

教材使用において、体験的に慣れ親しむことを考慮する。そこで、この単元を通して、話し手も聞き手も意味のあるやりとりで、事実（身につけているもの、持っているもの）を伝え合い、あるいは買い物場面で「欲しい」という気持ちを伝えて、互いにリアリティのあるインプットとアウトプットとなるコミュニケーションの体験や自己表現を楽しむことができ、達成感を得られる活動や場面を仕組む。

4. 授業実践

授業の流れと、授業における教材の具体的使用手順と内容は以下のとおりである。

第1時 様々な色の言い方や衣服の言い方を知ろう	
<p>○Song Colors ♪ 気付き・発見</p> <p>○Listening ・色と衣服の言い方を知る。</p> <p>慣れ親しむ</p>	<p>○色の絵カード ・CDを聞いて、聞こえた色をみんなで探り、色を提示した。</p> <p>○色の絵カード ・歌に出た色以外を1枚ずつ提示し、“What color?”と児童に聞いて導入し、言い方を繰り返した（教師1回、児童2回）。 ・チャンツに合わせて、絵カードを指した。</p> <p>○衣服の絵カード ・1枚ずつ提示し、“What’s this?” “What are these?”とク</p>

<p>気付き・発見</p> <p>・Do you have ~? の表現を知る。</p> <p>慣れ親しむ コミュニケーション</p> <p>○Activity ・友だちに持っている衣服を聞く。</p> <p>○Chant Do you have a cap? ♪</p> <p>慣れ親しむ</p>	<p>イズで衣服を導入した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・残りの衣服は、児童に同様の手順でクイズを出させた。 ・色画用紙で衣服の色を替え、クイズで児童に聞き、色+衣服の言い方を引き出した。 ・“I have ~. Do you have ~?”と児童に聞き、児童は“Yes, I do./ No, I don’t.”と答えるやりとりで、表現を導入した。ここでは、家にある服でもYesで答える設定にした。 ・自分が聞きたい色と衣服を自由に選ばせ、同じやりとりを、児童同士のやりとりに変えた。 ・CDのチャンツに合わせて、絵カードをそのままにし、色画用紙を替えた。
---	---

第2時 買い物の場面で、店に商品があるのかわいのか尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しもう	
<p>○Song 慣れ親しむ</p> <p>○Review ・色と衣服の言い方を復習する。</p> <p>慣れ親しむ</p> <p>○Chant 慣れ親しむ コミュニケーション</p> <p>○Prepare ・数字を復習し、数字+dollar(s)の言い方を知る。 ・買い物の場面で表現を知る。</p> <p>○Activity ・ミニ絵カードを用いて、買い物のやりとりをする。</p> <p>コミュニケーション</p>	<p>○色の絵カード ・何色が出てきたか、児童に確認し、絵カードを配り、自分と同じ色で立ち、歌わせた。</p> <p>○色の絵カード ・残りの絵カードを提示し、言い方を復習させた。</p> <p>○衣服の絵カード ・絵カードを提示し、“What’s this?” “What are these?”と児童に聞きながら、言い方を復習させた。</p> <p>○衣服の絵カード ・色を替え、同様に、色+衣服の言い方を復習させた。 ・残りを、児童に好きな色を選ばせ、同様にさせ、提示した。 ・CDのチャンツに合わせて、絵カードをそのままに、色画用紙を替えた。 ・先週できなかった児童に、自由に衣服と色を選ばせ、“Do you have ~?” “Yes, I do./ No, I don’t.”のやりとりをさせた。 ・児童に衣服の絵カードと色を自由に選ばせ、一緒に買い物のやりとりのモデルをした。</p> <p>○ミニ・衣服の絵カード ・好きな色+衣服を組み合わせ、机に並べ、ペア “Do you have ~?” “Yes, I do./ No, I don’t.”のやりとりを行わせた。</p>

第3時 買い物をしよう	
<p>○Review ・色と衣服の言い方を復習する。</p> <p>○Chant 慣れ親しむ</p>	<p>○色と衣服の絵カード ・色と衣服の言い方を児童に聞き、言い方を繰り返した。 ・自由に色と衣服の絵カードを選び、教師のリズムに合わせて、チャンツをさせた。提示方法を変え、黒板に色と衣服の絵カードを並べた。また絵カードを指</p>

<p>○ Show and tell オリジナル服の発表をする。</p> <p>○ Review ・ 買い物の練習をする。</p> <p>○ Activity Let's go shopping</p>	<p>差し、分かりやすくした。</p> <p>○ 自作の絵カード ・ 作成した衣服を紹介させた。 "I have ~."</p> <p>慣れ親しむ</p> <p>コミュニケーション 自己表現</p> <p>・ 買い物のやりとりをさせた。</p>
<p>第4時 買った物を発表しよう</p>	
<p>○ Song 慣れ親しむ</p> <p>○ Review</p> <p>○ Chant 自己表現</p> <p>○ Show and tell ○ 世界のいろいろな衣服を知る。</p>	<p>○ 色の絵カード ・ 教師のリズムに合わせて歌わせた。ここでは、児童に絵カードを選ばせ、その色で立たせ、その後ジェスチャーも交えた。</p> <p>○ 色と衣服の絵カード ・ 言い方を復習させた。</p> <p>○ 実物 ・ 児童が身につけているものや持っているものでチャンツをさせた。</p> <p>○ 自作の絵カード ・ 買った物を発表させた。</p>

毎回の授業後に、児童は振り返りシートを記入する。毎時間、前時の反省を生かし、教材の使用を改善していった。

5. 授業実践の考察

振り返りシートの記述、インタビューにおける児童の反応から、「①語句や表現の妥当性」「②絵カードの有効性」「③慣れ親しむこと」「④コミュニケーションの必然性」について作成した教材の効果を考察する。

振り返りシートの内容は、授業で一番大切だと思ったこと、興味をもったこと、感想の3項目である。

インタビューの内容は、振り返りシートの記述内容の詳細、授業を受けての感想、印象に残っていること、などである。

① 語句や表現の妥当性

下記のMさんの言葉から、色の言い方については、日本語と英語の発音の違いだけのものが多かったため、色の数は負担ではなく、新しい発見もあったので、知的好奇心を満たすものだったことが読み取れる。

Mさん:「色は普通の日常の中でも使って(お店屋さんの会話も)、元々知っている言い方ばかりだった。でも、黄緑や水色とかは初めて知った」

② 絵カードの有効性

Mさん:「絵カードに絵とかかいてあるので、イメージしやすかった。チャンツで絵カードを用いて、色の差し替えがあって分かりやすかった」

Kさん:「色の差し替えがあって、色が変わったときのイメージが分かりやすかった。赤い帽子は red cap とか」

Sさん:「絵カードを入れ替えたり、ジェスチャーで指したりしてくれたのでどれを言っているのか分かりやすかった」

また、Kさんは次のように記述している。

これは英語のいみがかんぶんがたけと:
だんたぶんがたけになてきました。(いみがかんぶんがたけ)
これかともかんぶんがたけです!
よくかんとは、たけに、だんたぶんがたけになてきました。たけに、だんたぶんがたけになてきました。たけに、だんたぶんがたけになてきました。

その後のインタビューで、「分からないところもあったが、教えてもらったり、教材があったから表現の使い方が分かった」ということが分かった。

これらの言葉や記述から、作成した絵カードが有効だったことが読み取れる。色と衣服の組み合わせが変わっても、イメージしやすく、視覚的に訴えるものが良いことが分かる。また、理解可能なインプットだったので、色+衣服(形容詞+名詞)の表現を文法としてではなく、子ども達自身で文法を導き出し、言語形式として捉えることができたと考えられる。これは、国語との関連、中学校での外国語とのギャップを軽減することが期待できるだろう。さらに、チャンツに合わせての使用、難しい言葉でも、絵カードがあることで、想像でき、理解できることも分かった。しかし、提示の方法を工夫するなど、活用の方法は今後改善の余地がある。

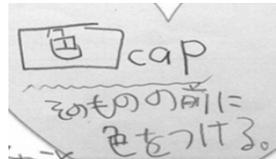
③ 慣れ親しむこと

Mさんは次のように記述している。

学習前は、色の英語を見にくく物の英語をか
か言えなかつたけど、学習して読むよになた。

インタビューでは、「チャンツや繰り返し言ってくれたので、まだ覚えていないのに言えた」という。

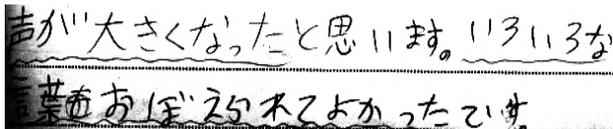
1時間目にAさんは、右のように記述した。



インタビューでは、「チャンツや友だちとのやりとりで繰り返して、なんとなく分かった」という。繰り返すことで、覚えるのではなく、自然に慣れ親しみ、話すことができたのである。このように、音声面に慣れ親しむことによって、中学校で4技能などのコミュニケーションの基礎を養う上での助けになるだろう。

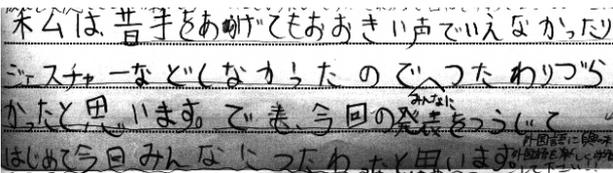
④ コミュニケーションの必然性

Kくんは次のように記述している。



インタビューでは、「言葉を覚えたのではなく、練習したり話したりして、いつ使うのかつながりが分かった。自分たちで実際に使って、使えるようになった」という。

また、Sさんは次のように記述している。



インタビューでは、「先生とも友だちとも、実際にコミュニケーション活動をして自分の意志が伝えられた」という。

さらに、Aさんは次のように記述する。

「チャンツやお金、せっきゃくの仕方などあってわかりやすく楽しくできてよかったな一と思ひました。私は公文で英語を聞く、読む、書くというべんきょうをしています。でも実際にやることも大切だな…とおもひました」

インタビューでは、「実際に自分の思ったことを話すのも大切だと思ひました」「ミニばんで、実際に自分で好きな色を入れ替えることがで

きたから」「買い物など友だちが好きな色とか、持っている服とかの色を自分で聞けたから」ということが分かった。これらから、自分の思いを伝えることができ、達成感や楽しさを感じていることが分かる。小・中学校間において、意味のあるやりとりの中で、コミュニケーションを展開することによって、子ども達の負担を減らすことが期待できるだろう。課題としては、場面設定をよりリアリティのあるものにするなど改善の余地がある。

6. 成果と今後の課題

本年度の実践を通して、教材のもたらす効果として、教師も児童も利用しやすく、児童に受け入れやすい教材を用いることによって、英語が分からない子どもでも、教師や友だちとの意味のあるやりとりの中で理解できることが新しい発見となった。また、小・中学校間の連携における教材研究の視点や、教材の効果をより上げるための工夫なども分かった。

今後の課題として、第3時で行った授業は2時間かかってしまったことから、活動時間を保障していくことが必要である。また、小・中学校間でのギャップを埋めるために、教材の連携が大切であり、小・中学校でも使える教材であれば、子ども達がギャップを感じず、安心して授業に臨めるのではないだろうか。

来年度は、ギャップを埋めるための他の手立てに焦点をあて、研究を進めていきたい。

7. 参考文献

- ・酒井英樹. 2007. 『小学校英語と中学校英語を結ぶー英語教育における小中連携ー』. 高陵社書店
- ・樋口忠彦. 2010. 『小学校英語教育の展開ーよりよい英語活動への提言ー』. 研究社
- ・文部科学省. 2009. 『英語ノート1 指導資料』. 文部科学省
- ・文部科学省. 2008. 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』. 東洋館出版
- ・文部科学省. 2008. 『中学校学習指導要領解説 外国語編』. 開隆堂